

Five And Seven And Five

— Richard Right の Haiku —

高橋 悦男

I

“HAIKU This other World”¹⁾ は英語で作られた俳句の句集としては初めての本格的な個人句集である。著者のリチャード・ライト (Richard Wright, 1908-1960) は、“Black Boy”、“Native Son” などの作品で知られたアメリカの黒人小説家だが、日本の俳句に興味を持ち、晩年に4000句以上の俳句を書き残した。それは彼の死後、長い間未発表のまま眠っていたが、1998年、伯谷義信、ロバート・L. テナー両氏の手によって整理編集され、ニューヨークのアーケイド社 (Arcade Publishing) から一冊の句集として出版された。

この句集の特徴は、それが単に外国で出版された本格的な個人句集であると言うだけでなく、内容的にも前例を見ない画期的なものだということである。この句集には全部で817句の俳句が収録されているが、そのほとんどが、いわゆる有季定型で作られている。つまり、伝統的な日本の俳句と同様に季語を持ち、かつ五七五の十七音節で出来ているのである。日本語と英語では言語の構造が天と地ほどに違う。その違いを乗り越えて、日本語と同じ五七五のリズムで俳句を作るということは至難の技である。事実、多くの外国の俳句作者達は、その困難さの為、五七五の定型で俳句を作ることを諦め、自由律で作っている。

Lily:

Out of water

Out of itself.

N. Virgilio (1963)

Searching on the wind,

the hawks cry

is the shape of its beak.

J. W. Hackett (1963)

1) Published in the United States by Arcade Publishing Inc., New York.

等はその好例である。これらの英語俳句は1963年の日本航空主催の俳句コンテストにおいて最高位に選ばれたものだが、いずれも五七五の十七音という定型はとっていない。作者にも選ぶ側にも、十七音の定型で作るという意識は全く感じられない。もっとも、当時は英語俳句はまだ始まったばかりで、俳句に関する知識が一般の作者にも乏しく、俳句といえ、ただ短く書きさえすればよいぐらいの認識しかなかったのかもしれない。事実、このコンテストも回を重ねるにつれて、五七五の形をとったり、それに近付こうという傾向が見られる。

Sunset carrying

a red balloon, he looks back
a child leaves the zoo.

W. F. O' Rourke (1964)

The old rooster crows

out of the mist come the the rocks
and the twisted pine.

O. M. B. Shouhard (1965)

両者を比べた場合、作品の出来栄として前の二句が優っていることは誰の目にも明らかであろう。表現に無駄がなく、かつ発想が鋭く、一つ一つの言葉が生きている。それに比べ、後の二句は形式は五七五の定型をとっているが、それにこだわるあまり、表現が冗長になり、歯切れが悪い。英語本来のリズム感を失っているのである。英語で五七五の十七音で俳句を作ることの難しさを如実に示している好例である。

英語俳句の形式について、Harold Hendersonは次のように述べている。

What form is the best for haiku in English is still an open question. It has, we think, been shown that an invariable 5-7-5 syllables count is not an adequate answer.²⁾

また、次のようにも言う。

It may safely be said that most American writers of haiku today do use at least an approximation to a 5-7-5 syllable count. But they also employ the devices of stress and rhythm, traditional in English poetry.³⁾

日本の俳句の形式である五七五の十七音というリズムは日本語という言語組織から生まれた固有の形式であり、従って英語には英語の独自の形式があってよいというのである。これは日英語の相違を考えれば当然出てくる考えで、最近の英語俳句の形式はほぼこれで固まってきている、と思われていた時に、ライトの“HAIKU This Other World”が出版された。この句集は個人句集であるというだけでなく、ほとんどの句が季語を含んでお

2) HAIKU IN ENGLISH by Harold Henderson, published by Charles E. Tuttle Company, Inc., p. 32.

3) Ibid., p. 31.

り、しかも十七音節で作られている。季語は無くてもよく、形式も十七音節を無視して、三行書きでよいという現行の英語俳句にとって、まさに晴天の霹靂といってよい。

ライトはもともと小説家である。ミシシッピ州の貧しい農家に生まれ、人種差別の中で暗い青春を過ごし、その生き立ちを描いた“Uncle Tom’s Cabin”や“Native Son”等という小説で才能を認められ、作家の仲間入りを果たした。しかし、彼の描く人種差別をテーマにした小説は第二次大戦以前のアメリカ社会では人々の反感を買い、ライトは危険人物視された。共産党員であったことも、彼の立場を苦しくした。1944年には共産党と決別するが、アメリカ社会に絶望したライトは第二次大戦が終わると、家族と共にフランスへ逃避し、そこに定住した。俳句に出会ったのはその時である。アメリカの友人からブライス (R. H. Blyth) の“HAIKU”四巻⁴⁾を借り受けて読むうちに、俳句のとりこになり、自分でも俳句を作り始める。

ブライスの“HAIKU”は全四巻から成り、芭蕉から子規まで、2600句にも及ぶ俳句を英訳し、解説をつけた体系的、かつ綿密な研究書で、日本の俳句を海外に紹介する上で大きな役割を果たして来た。この本との出会いがライトの人生を変えた。それまで無為の生活を送っていたライトは生き返ったように俳句に熱中し、以後亡くなるまでの十八ヶ月に約4000句の俳句を作る。一月に直すと約220句ということになり、これは日本の俳人の作句ペースから言ってもかなりの多作と言える。一ヶ月に200句作るということはそう難しくはないだろうが、それを十八ヶ月続けるということは大変なことである。芭蕉は生涯に千余句、多作の虚子は生涯に七万句作ったと言うが、七十年近くかかっている。年にすれば千句、月にすれば百句以下。ライトの十八ヶ月で4000句というペースがいかにハイペースであるかが解る。同時にこの数字はライトがいかにこの時期、俳句に打ち込んでいたかということをも物語っている。

ライトのこの憑かれたようなエネルギーは一体どこから来たのだろうか。一つには、彼が小説家だったということだと思ふ。もちろん、小説と俳句では発想も文体も違う。しかし、長い小説を書き慣れたライトには、休みなしに俳句を作り続けるという作業がそれほど苦痛ではなかったのではないか。つまり、彼は小説を書くように俳句を作ったのである。少なくとも小説を書いていたことが、彼のこの多作に役立ったことは確かであろう。江戸時代の小説家井原西鶴は小説を書く前には俳句を作っていたが、一日に23500句を作って日本新記録を打ち立てた。この記録を最後に西鶴は俳句をやめ、小説に転向する。ライトとは逆のケースだが、多作と小説家という思い合わされて興味深い。

ライトが俳句に熱中したもう一つの理由は、彼がこの日本の伝統的な小詩形に自分のアイデンティティを見出したということである。ライトの小説は“Uncle Tom’s Cabin”にせよ、“Black Boy”にせよ、また“Native Son”にせよ、極めて政治的、社会的で、その

4) 北星堂書店、1945-1952、全四巻。

根底には人種差別への激しい反発と憎悪がある。ライトは全ての黒人の代弁者としてそのテーマに取り組み、ある程度成果をあげた。しかし、その代償として祖国を追われ、亡命者の生活を余儀なくされた。病にも倒れた。⁵⁾

俳句に出会った時、ライトは精神的にも肉体的にも疲れきっていた。俳句はその彼に安らぎを与えた。俳句は自然を詠む。人間同士の憎しみや争いを描いてきたライトにとって、憎しみも争いもない自然を詠う俳句は全く新しい世界として映ったのではなかろうか。人間社会に疲れきったライトに、俳句は救いの神のように現れた。その新しい世界を彼は「別世界」「This Other World」と名付けた。“This”は強調で、ライトが俳句との出会いにいかに感動したかを示している。

ライトが出会ったブライスの“HAIKU”四巻に出てくる俳句は全て日本の古典俳句の翻訳である。従って、季語はどの句にも入っているが、五七五の定型は必ずしも守られていない。さすがのブライスも2600もの古典俳句を五七五の定型で英訳することは出来なかったのであろう。定型についてブライスは、英語俳句においては十七音節を守る必要はないと言い、さらに続けて、

The ideal, that is, the occasionally attainable haiku form in English, would perhaps be three lines, the second a little longer than the other two, a two three two rhythm, but not regularly iambic or anapaestic, rythm avoided, even if felicitous and accidental.⁶⁾

と述べている。要するに、英語俳句は形式にとらわれず、三行で書けばよいというのである。事実、“HAIKU”の中の英語俳句は全て三行で訳されている。英語俳句は当初、必ずしも三行書きではなかったが、今ではほとんど三行書きに定着したかの感がある。それにはブライスの訳が一役買っていると思われる。

ライトが“HAIKU”で巡り会った英語俳句は、そういうわけで季語は持っていたが定型ではなかった。にもかかわらず、ライトはブライスの英訳には従わず、あえて五七五の十七音節の定型を用いて彼の俳句を作った。これはどうしてなのか。彼はある日、娘のジュリア (Julia) に向かって、

“Julia, You can write them, too. It always five and seven and five like math.”⁷⁾

と言ったという。“three lines”と言わず、“five and seven and five”と言っているのが注目される。彼にとって俳句は三行で書くものではなく、五七五の音節を持った定型詩だっ

5) HAIKU This Other World, INTRODUCTION.

6) HAIKU VOL. 2, p. 350.

7) HAIKU This Other World, INTRODUCTION.

たのである。季語と定型という形式にライトはひかれたのである。こういう形式は欧米の詩にはない。そこにライトは別な世界、つまり“Other World”としての魅力を感じたのではなからうか。

季語についてはライトは何も言っていない。ブライスの訳にも季語が全て入っているし、この点については何も迷うことはなかったと思われる。しかし、俳句には季語があるので自分も季語を使うといった消極的なものではなく、この点についても、ライトは積極的に取り入れたのではないかと思う。ライトはアメリカのミシシッピ州の片田舎で生まれ育った。俳句に出会った時、そこにある様々な季語は彼に故郷ミシシッピのなつかしい自然を思い起こさせたのではなからうか。娘のジュリアによれば、ライトは自分の故郷を嫌っていたという⁸⁾。その理由は故郷が貧困と飢えと人種差別を思い起こさせたからだという。しかし、俳句で詠われている自然は貧困とも飢えとも、ましてや人種差別等とも関係ない。逆に、そういうものに苦しむ人の心を慰め、癒してくれる自然である。ブライスの英語俳句を読み進むうちにライトは次第にそのことを理解したはずである。そして、俳句に熱中していった。俳句の魔力に取り憑かれたのである。そのコースは多くの日本の俳人達と似ている。外国人は言葉で俳句を楽しむ。日本人は単に言葉を楽しむというより、生きる証しをそこに求める。俳句をもう一人の自分として考えるのである。ライトの俳句への熱中には、日本人の俳句への姿勢に通じるものがある。ライトにとって俳句は単なる言葉遊びではなく、もっと切実な、言わば生きる証しとしての闘いだったと言ってよい。でなければ、十八ヶ月に4000句などと言う、驚異的な作句は出来なかつたであらう。

ライトは俳句手帳を片時も手放さなかったという。すでに作家としては筆を折っていたライトにとって俳句は最後のよりどころだったかもしれない⁹⁾。彼は二年足らずの年月で作った4000句の俳句を817句に絞り、出版する予定だったが、病気が悪化して果たせず、1960年に亡くなった。原稿はそのままエール大学図書館に眠っていたが、1998年になってようやく出版されたのである。

句集というと豪華なものが多いが、ライトの句集もハードカバー、背金文字の立派なもので、娘ジュリアの“INTRODUCTION”と編者の“EDITER'S NOTES”、“Notes on the Haiku”、“Afterword”までもついており、本格的な構成となっている。

英語俳句の作者達には物珍しさや異国趣味で俳句を作るものや、単なる遊びや趣味として作る人が少なくないが、ライトは俳句を小説と同じく、彼自身の自己表現として全身全霊を傾けて作った。“HAIKU This Other World”は文字通り彼が命をかけ、命と引き換えに手にした句集だったと言ってよい。この点、多くの英語俳句の類書とは完全に一線を画している。

8) Ibid.

9) Ibid.

II

ライトは小説家として成功し、そして挫折した。祖国のアメリカに居られなくなり。自己亡命してフランスに移り住んだ。そこで俳句に巡り会い、死ぬまでのわずか十八ヶ月の間にほとんど至難と思われる季語と十七音を用いた4000句以上の俳句をつくった。「別の世界」“This Other World”と彼が名付けたその世界とは一体どんな世界だったのだろうか。目につくままにいくつかの句を拾いながら見てみよう。

- 1.¹⁰⁾ I am nobody:
A red sinking autumn Sun
Took my name away.

“HAIKU This Other World”はこの句から始まっている。句集の巻頭句は最初に読者の目に触れる句なので、誰でも慎重に選ぶ。ただ、日本の句集の場合は、ほとんどの句集が作句年代別か四季別に編集されているので、句の配列には制約があり、作者の思い通りに並べる事は出来ない。それでも、その作句の年代の中や季節の中で、自分の好きな句を選んで巻頭に置くことは出来る。例えば、虚子の第一句集『五百句』¹¹⁾の巻頭句は

春雨の衣桁に重し恋衣

だが、作られたのは明治27年。同年にはこの一句しかなく、巻頭第二句は

夕立や濡れて戻りて欄に倚る

で、翌28年の作である。28年には、これを含めて、二句あり、29年になると、作句数は急に増えて15句となる。28年の「春雨」の句は虚子の句集の上での処女作で、しかも一句しかないものを、あえて第一句集の巻頭に置いたということは、虚子がこの句をよほど気に入っていたということ、つまり、自信作であったということだと思ふ。事実、この句と次の「夕立」の句を比べて見れば、優劣は明らかで、この句を巻頭に置いた虚子の意図は誰にも頷ける。

ライトの句集の場合は、句の配列は作年別でも、四季別でもないから、どの句を巻頭に置くかは全く彼の自由で、恐らくライトは自分の最も好きな句、最高の自信作をここに置いたのではないかと思う。まず、“I am nobody”という書き出しに注目したい。

“I am nobody”とは一体どういうことなのか。「私は誰でもない」とは、もちろん、事実を言ったのではなく、「誰でもないのと同じ、つまり、無に等しい人間だ」という意味

10) 原句の前の数字は原書中の句番号を示す。

11) 改造社、昭和12年。

である。

ライトはかつては、“Black Boy”や“Native Son”などの作者として名を知られた小説家だった。しかし、今はアメリカを追われ、フランスに亡命して、名も無いただの老人になってしまった。その無名の存在となってしまった自分を“Nobody”と自嘲して表現したのである。と同時にそこには前途に望みを失った人間の深い苦しみと絶望感がにじみ出ている。単なる言葉遊びではないのだ。

次にこれに続く“A red sinking autumn Sun / Took my name”だが、この「赤い秋の夕日」とは何だろうか。ロバート・テナーは、「赤い夕日」は西洋世界、端的にはアメリカを指すと言っている¹²⁾。

たしかに、ライトは西洋世界に反逆し、アメリカを追われ、フランスに逃げて来た。その意味では彼の名前を奪ったのはアメリカだと言ってよいかもしれない。しかし、なぜ「秋の夕日」なのか。彼の名前を奪ったアメリカなら「秋の夕日」より「ざらざらした真夏の日」の方がふさわしい。「秋の夕日」にはもっと別の意味があるのではないか。私は「秋の夕日」はライト自身を指しているのではないかと思う。「秋」は彼の人生の終わりを示し、「赤い夕日」はまさに今、人生の夕方にさしかかっているライト自身の姿なのだ。そう解釈するのが自然だと思う。

私はこの句を見て、自分の耳を切ったゴッホの自画像を思い出した。この句は、ライトが人生の終わりを迎えるに当たって自分を描いた自画像なのだ。彼は句集を編むに当たって、巻頭にまず、自分の自画像を据えたのである。巻頭句としてこれ以上の句はないと思う。

“I am nobody”は、その裏にライトの代表作である“Black Boy”や“Native Son”を内包している。“I am nobody”は“I am Black Boy”、“I am Native Son”の裏返しなのだ。ライトにはそういう小説の作者としての自負がある。その自負が今夕日と共に地の彼方に沈もうとしている。一句はその彼の嘆きを夕日に託して詠んでいるのだ。

31. In the falling snow
 A laughing boy holds out his palms
 Until they are white.

“I am nobody”と嘆いた作者はここではあどけない少年に立ち返っている。しかし、雪の中に立って両手を広げ、てのひらが雪で真っ白になるのを見て笑っている少年の姿はあどけなさを通り越して、哀れであり、みじめでさえある。少年が笑えば笑うほど、読者は笑えなくなるのだ。それは少年が黒人だからだ。彼はその手のひらの色が黒いために、自分が差別され、迫害されていることを知っている。だから、降り積もる雪によって、手の

12) HAIKU This Other World, AFTERWORD, p. 277.

トの恨みは人種差別に対するもので比較にならないほど根が深い。同じ雪を詠みながら、二つの句の間には大きな落差がある。

119. On a clapboard house
An old oak tree's shadow fades
In the spring sunset.

“clapboard house” は板で出来た貧しい農民の家、多分、ライトの生まれた家であろう。その家に覆いかぶさるように大きな檜の老木が立っている。これはアメリカ南部の典型的な黒人奴隷の家である。

ライトは自分の育った田舎を嫌っていたという¹³⁾。それはこういう風景だったのかもしれない。故郷は確かに懐かしい。しかし、それは同時に忌まわしい奴隷農民としての自分の生き立ちを思い出すことでもある。ライトはそれが嫌だったのであろう。しかし、今、年老いて、異郷に暮らす身となると、嫌いだった田舎の風景が奇妙に懐かしくなったのではなからうか。板囲いの家や檜の老木には貧しい農家の面影が漂うが、檜の老木の陰が消えようとしている春の夕日には明るさがあり、ライトがその風景を暗いものとしてではなく、明るいものとして受け止めていることが解る。最初に引いた“I am nobody”の句の“A red sinking autumn Sun”の秋の夕日と比べると両者の違いは明らかである。ライトは嫌いだった田舎の風景を受け入れている。そして懐かしんでいるのである。これはライト俳句の原風景である。そして、これがあったことが、ライトを俳句に結びつけることになったのだと言える。もし、ライトが南部の農村の出身でなく、シカゴあたりの工場労働者の出身であったなら、多分俳句との出会いも無かったのではなからうか。

ライトの句において“spring”が明るいものを暗示していたのと対照的に、“autumn”は暗いものを暗示している。

129. This winding dirt pass
Ends in a tangle of sorns
In the autumn mist.

130. A long autumn day:
A wind blowing from the west
But none from the east.

茨の茂みに消えている曲がりくねった道は、ライトが歩んできた道そのものであろう。ここではその道が秋の夕日ではなく、霧に包まれている。道はその霧に隠れ、行く先は模糊として見えない。

13) Ibid., INTRODUCTION.

次の句では、風は西から吹いてくる。なぜ、西からなのか。西は太陽の沈む方角、一日の終わる方角である。それは作者ライトの人生の終わりを暗示しているのだ。しかも東からは風は吹いて来ない。ということは、希望は一切無いということ。“A long autumn day”には希望の無いその生活にじっと耐えている作者の気持ちが滲んでいる。

134. One autumn evening
 A stranger enters a village
 And passes on through.

村に入って来た旅人はもちろんライトである。アメリカに住むことが出来ず、パリに逃げて来たライトはまぎれもなく“stranger”だが、アメリカに居たときも社会に受け入れられない“stranger”だったのだ。そして、単に“stranger”であるだけでなく、そこに止まることが出来ず、“passes on through”、〔通り抜けて行く〕というのが厳しい。旅人は止まることが出来ないのだ。ここでも“autumn evening”という季語が効いて居る。旅人は歩き続けるが、秋の日は暮れやすく、すぐに夜が来る。夜になれば旅人は歩くことは出来ない。それは人生の終わりを意味する。

136. The road is empty,
 The one leading into the hills
 In autumn twilight.

誰も通らない一本の道が山に向かって伸びている。ここには作者は登場しないが、作者は句の外にいてその道を見ている。と言うより、この道は現実の道ではなく、作者の心の中にある道で、作者はそういう道を頭の中で思い描いているのだ。それは今、作者がたどっている道、彼の人生の道に他ならない。しかも、〔秋の暮〕、日は暮れようとしている。“evening”はなく、“twilight”を使っているのがわびしい。

この句は芭蕉の

この道や行く人なしに秋の暮

を思い起こさせる。多分、ライトはブライスの英訳でこの句を知っていたらと思うられる。

 Along this road
Goes no one,
 This autumn eve. Basho¹⁴⁾

14) HAIKU, VOL. 4, p. 341.

が、ブライスの訳だが、芭蕉は“no one”と人に焦点を絞っているのに対し、ライトは“road”と「道」に焦点を当てている。その違いはあるが、言っている内容はほとんど同じである。この句についてブライスは次のように述べる。

This is not sentimentality, nor is it stoicism. There is an unutterable feeling of “loneliness” which is quite ordinary loneliness with something profounder and not undesirable in its inevitability. In the same way, this road along which Basho travels alone is the way of Poetry, which, to this day, how few there are that tread! ¹⁵⁾

芭蕉の句について述べられたこのコメントはそっくりライトの句についても当てはまる。ブライスがいみじくも言っている“unutterable feeling of loneliness”こそ、ライトの俳句の根底に流れているものである。そして、その“loneliness”の表現に当たって「秋」の季語の果たしている役割が極めて大きいということをここでは指摘しておきたい。

ライトは同じ「秋」という季語でも、“autumn mist”、“autumn day”、“autumn evening”、“autumn twilight”とさまざまに使い分けて、巧みにニュアンスの違いを表現している。季語をこのように掘り下げて使った例は外国の俳句では例が無く、その意味でも本書は画期的といってよい。

453. The sound of a rat
 Gnawing in the winter wall
 of a rented room.

459. I am paying rent
 For the lice in my cold room
 And the moonlight too.

ライトはパリで借家住まいをしていた。その家には鼠がいて壁をかじり、虱もいたようである。借家での暮らしはつましいというより、貧しかった。しかし、ライトはそういう貧しい暮らしを嘆いたり、悲しんだりしてはいない。「鼠が壁をかじっている、虱に家賃を払っている」と淡々と事実だけを述べている。こういう手法はやはり俳句から学んだものであろう。特に後の句の「月の光にも家賃を払っている」というのは洒落で俳諧である。

522. My binoculars
 Show me far across the bay,
 Narcissus flowers.

15) Ibid., p. 342.

この句は一茶の「三文が霞見にけり遠眼鏡」を下敷きにしているかも知れない。しかし、霞を見た一茶の句は皮肉だが、水仙を見たライトの句はもう少しひねりが効いていて複雑である。水仙は花言葉では「うぬぼれ」「自己愛」を表す。ギリシャ神話でナルシスが水中の自分の顔に見とれて水に落ち、溺死したという故事に基く。ライトの小説は生前は世に入れられず、売れなかった。売れない小説家である自分をライトはナルシスになぞらえたのである。これはうぬぼれというより、皮肉であり、自虐と言ってもよい。その点では一茶に共通している。しかし、自分を見つめている点、一茶より鋭く深い。一茶は他人には厳しかったが、自分には甘く、芭蕉のような求道者にはなれなかった。ライトの句には求道者の一面が見られる。彼が単に俳句を異国趣味の遊びとして楽しんだのではなく、自己表現の一つとして真剣に取り組んでいたことが解る。

7. Make up your mind, Snail!
You are half inside your house,
And halfway out!

740. Drying in the sun,
Gleaming in dirt pathway,
The track of a snail.

殻から半分身を乗り出し、半分は隠れているかたつむりは、作者自身であろう。それはアメリカに生まれ育ちながら、パリに逃避して暮らしている中途半端なライト自身のことを言っているのである。“Make up your mind”とはそういうどっちつかずの自分にしっかりしろと呼びかけているのである。ライトはパリに亡命をした。しかし、それは心ならずもの事であって、本心はアメリカにとどまりたかったのである。当時のアメリカではそれが許されなかった。故国を離れる時、ライトの心は行くべきか、留まるべきか、揺れたに違いない。その心境をかたつむりに託して詠んだのである。

740の句ではかたつむりは隠れて見えない。這った跡だけが、日に乾いて光って残っている。ここでもかたつむりはライト自身である。かたつむりの這った跡はライトがアメリカに残して来た足跡なのだ。今、彼はパリに居る。そして、故郷に居たころのことを思い出している。

172. Scarecrow's old hat
Was flung by the winter wind
Into a graveyard.

577. Scarecrow, who starved you,
Set you in the ice wind,
And then forget you?

ここでもライトはかかしに託して自分を詠んでいる。かかしが古い帽子を被っているのは、彼が年老いているからである。その古い帽子が冷たい冬の風に飛ばされ、墓場に飛んでいった。ライトは自分の死を予感していたのであろう。かかしは秋の季語、冬には片付けられて見られない。そういう季語の乱れはあるが、かかしを見たこともないアメリカ人のライトにそこまで言うのは酷であろう。

二句目のかかしもライトの分身であろう。飢え、冬の冷たい風に吹かれている自分に問いかけ自問自答している。パリでの暮らしは単に異国での生活という以上に辛いものだったに違いない。“forget you”には自分を追い立てた故国に対する恨みが感じられる。と同時にそれは自分をそこまで追い込んだものに対する抗議でもある。そこにはかつての“Native Son”や“Black Boy”に見られるような厳しさは無いものの、人種差別や白人社会に対する抗議が底流として感じられる。ただ、それがかつての小説のようにあからさまでないのは問いかけがかかしに対してなされているからである。かかしはライト自身でもあるが、同時に白人社会でもある。自分をかかしになぞらえて自嘲していると同時に白人社会をかかしに見立てて茶化しているのである。このような季語の使い方はブライスの“HAIKU”を通じて学んだものであろうが、短時日の間によくこれだけ使いこなせたものと感心する他はない。

507. From out of nowhere,
 A bird perches on a post,
 And becomes a crow.

少し俳句を学んだ人なら、この句を見てすぐ、芭蕉の

枯枝に鳥の止まりけり秋の暮

を思い起こすであろう。ブライスの訳を見よう。

Autumn evening;
A Crow perched
on a withered bough.

Basho¹⁶⁾

芭蕉の句では鳥は木の枝に止まったままで動かない。ライトの句では鳥はどこからか飛んで来て杭の先に止まる。枯枝か杭の先かという違いはあるが、発想は同じ、ほとんど類句と言ってよい。ただ、芭蕉の場合、鳥と枯枝との取り合わせに重要な意味がある。枯枝に対しては鳥は絶対に鳥でなければならない。その取り合わせから生まれるわび、さびが芭蕉の世界である。ライトの句には枯枝は無い。枯枝と杭では句の内容は全く違ってくる

16) HAIKU, VOL. 3, p. 338.

る。杭の先に止まった鳥は絵にはなるが、芭蕉の句のような深い意味はそこからは生まれ
てこない。もちろん、ライトもこの句で鳥の絵を描こうとしたのではない。彼の句では鳥
は初めから杭に止まっていたのではなく、どこからか飛んで来た。しかも飛んで来た時
は、鳥ではなく、ただの鳥で、杭に止まってから、鳥となる。そこに意外性があり、ライ
トはその意外性にモチーフを見いだしたのである。両者は一見同じように見えて実は全く
別の句と言ってよい。ライトの句は形は芭蕉に似ているが、内容的には荒木田守武の

落花枝に返ると見れば胡蝶かな

に似ている。この句はブライスの訳が無いが、外国では早くからよく知られた句なのでラ
イトも知っていたのではないかと思われる。

更に次の句、

117. The crow flew so fast
 That he left his lonely caw
 Behind in the fields.

もブライスの“HAIKU”にある几湫の句「秋の暮鳥の鳴かて通りけり」の訳、

An autumn evening;
Without a cry,
A crow passes. Kishu¹⁷⁾

とよく似ている。几湫の句では鳥は鳴かず、ライトの句では鳥は鳴いている。違いはそれ
だけで、発想は同じである。ただ、もう少し詳しく見ると、違いが無いではない。まず、
几湫の句には“An autumn evening”と季語があるが、ライトの句には季語が無い。几湫
は「秋の暮」という季語を入れることによって鳥が声もなく飛んでいる淋しい情景を更に
強めようとしたのである。この意図は成功している。ライトは季語の代わりに“lonely”
という語を使って直接淋しさを表現している。あえて“lonely”と言わなくても、淋しさを
表現出来るし、そのほうが俳句としてはよいのだが、ライトはどうしても、“lonely”
が使いたかったのであろう。それほどライトの孤独は深かったと言える。几湫はこの句で
秋の暮のわびしい景色を詠もうとした。そのため客観写生に徹している。ライトは単に風
景を詠むのではなく、自分を詠もうとした。鳥は現実の鳥ではなく、彼の心中の鳥、言い
換えれば彼自身なのである。それが、同じテーマを詠みながら、全く違う表現となったの
である。

私たちはかたつむりの句ですでにライトが同じ方法で自分を詠んでいるのを見て来た。

17) Ibid., p. 345.

しかし、鳥の句はかたつむりよりはるかに数が多い。かたつむりの句は全部で5句しかないが、鳥の句は28句もある。これは動物を詠った句の中で最も多い。因みに鳥の次に多いのが猫で23句、三番目が雀と牛で20句となっている。なぜ、鳥の句がこれほど多いのか。それは鳥の羽の色が黒いので自分と同じ色をした鳥にライトは親近感を抱いたのだと言っては穿ち過ぎかもしれないが、当たらずといえども遠からずではなかろうか。鳥は色が黒いだけでなく、芭蕉の句や几湫の句でも見てきたようにその姿にはほどことなく孤独な陰があり、他の鳥とは違った独特の風貌がある。その姿にライトは自分と共通のものを感じたのではなかろうか。鳥と黒人ではつき過ぎかもしれないが、ライトが鳥の句を他のなによりも多く作っているということは、単なる偶然とは思えない。

612. Above leafless trees,
A crow skims a dark brown hill
And heads for the sun,

760. An autumn river:
A crow with a broken wing,
Cawing as it floats.

葉を落とした枯れ山を越えて、太陽に向かって飛んで行く一羽の鳥は、かつての若い時のライトの姿であろう。彼を取り巻く社会は厳しかったが、当時の彼には希望があった。

次の句は、あらゆる努力も空しく、傷つき敗れたライトの今の姿であろう。まだ死んではいない。しかし、羽根は折れ、川に漂っている。死は時間の問題である。川は故郷のミシシッピー河であろう。

III

ライトは人種対立の渦巻くアメリカを逃れて、フランスへ亡命した。そこで病に倒れ、希望を失っていた時に友人からブライスの“HAIKU”四巻を借り受け、俳句という短い日本の詩に出会った。この出会いがライトの人生を変えた。彼はこの日本の詩に取り付かれ、それから約一年半の間に、4000もの俳句を作った。

ライトはこの前年、1959年に最愛の母を失っている。同じ年、心の底から尊敬していたフランスの作家、アルベール・カミュが自動車事故で亡くなっている。病氣と生活苦、心の支えまで無くしたライトにとって、俳句との出会いは、まさに地獄に仏だったのではあるまいか。堰を切ったように彼は俳句を作り始める。俳句については、ブライスの“HAIKU”四巻を読んだだけの知識しか無かったが、彼は季語と十七文字という二つのルールだけを手掛かりに、ひたすら、五七五と詠み続けた。

俳句についてほとんど無知だったライトにそれだけ俳句が作れたというのは俳句が短

く、加えて、季語と十七音節という手掛かりがあったからだろうが、何より、彼がこの日本の詩の中に自らのアイデンティティを見いだしたからだと思う。俳句は自然と人間、とりわけ自分を詠う自分詩である。花を詠い、鳥を詠い、山や河を詠っても、それはあくまで手段であって、俳句の究極の目的は自分を詠うことである。そういう俳句の世界に、病苦と貧困にあえぎ、心の支えまで失ったライトは自分の安住の地を見出したのだ。

ライトはミシシッピの片田舎で生まれ育った。そこには美しい自然があった。この環境が彼が俳句に入る下地となったであろうことも否めない。俳句に出会った時、彼は懐かしい故郷と出会ったのである。そのことに彼の心は安らぎ、一層俳句に引き付けられたのではなかろうか。

ライトは自分の作った4000もの俳句の中から817句を選んで“*This Other World*”として原稿をまとめた。817句の17は俳句の十七音節に因んだものであろう。ライトにとって俳句とは *five and seven and five*、つまり、十七音節の定型詩だったのである。そして、その十七音節の世界こそ、彼の言う“*This Other World*”、「別世界」だったのである。

“*HAIKU This Other World*”に収められた817の俳句は日本の伝統俳句と形式的に同じであるばかりでなく、内容的にも、単なる言葉遊びでなく、季節との関わりの中で、人間の在り方や行き方を追求した本格的な句集である。季語の使い方や表現の上で、多少の乱れや無理はあるが、英語で有季定型の俳句を作り、一冊の句集にまとめたという功績は、大きい。ライトがこの句集の出版を待たずに逝ったことが惜まれる。もし、彼が俳句を作り続け、第二句集、第三句集と発表していたなら、英語俳句は今とは変わったものになっていたかもしれない。

この句集の出版を機に、現在、三行書きの自由詩となった英語俳句に、改めて有季定型を見直す気運が生まれるかも知れない。いずれにせよ、やや安易に流れている感なきにしてもあらずの英語俳句に本書が一石を投じたことは間違いない。